
ままととはまたべつの物語

原 始人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「まま」ととはまたべつの物語

【著者名】

原 始人

N4803F

【あらすじ】

子どものころに遊んだまま」とが現在の出来事とリンクする。あとのこのまま」とと現在していふことはどう違うのだらう。

とてもとても遠い記憶。

僕が保育園に通っていたころ。

季節はわからない。燃えているのか燃え尽きてしまったのか、夕方のオレンジ色がすべてを呑み込んでいた。保育園も運動場も砂場も滑り台もオレンジ色に染まっていた。

僕はその光景に寂しさを感じていて、すぐにでも家に帰りたかった。父と母の待つ暖かい家に。しかし母はまだ迎えに来ない。

そして僕は自分の本当の家とは違う偽物の家に帰る。

「ただいま」

「おかえり」

僕はビニールシートの上に足をのせる。かばんを置くまねをする。コートを脱ぐまねをする。そして冷たく固いビニールシートにあぐらをかく。

違う偽物の家とはつまりままでこの家。

僕はお父さんの役。奥さんの役は一つ上の村中圭ちゃん。髪の長いやせ細った女の子。すぐに怒っておもちゃを投げつけてくる。口不出さなかつたけど、僕が怖っていた女の子。

そのまま圭ちゃんがビニールシートに座って、僕に泥だらけを差し出す。

「今日は中華よ」

そう言つて笑う。僕は泥だらけを食べるまねをしながら、早く家に帰りたいと思った。

「パパ、おかえり」

娘役もいる。僕と同じ年の西弥子ちゃん。おかげで頭にやえ歯でいつも転んでは血を流していた。それでも泣かずこみく笑うとても強い子だった。

「ただいま。いい子にしてたか」

と僕はたずねる。西弥子ちゃんはやえ歯をひとつぞかせて「うん」と元気にうなづく。しかし奥さん役の村中圭ちゃんがそれを遮つて言つ。

「ううん、この子、今日風邪で学校を休んだのよ」

西弥子ちゃんは驚いた顔で圭ちゃんを見ている。

「休んでないよ」

弥子ちゃんが訴えても奥さん役の圭ちゃんは聞き入れない。仕方なく僕は弥子ちゃんに言つた。

「いいんだよ。一回くらへて休んでも」

「休んでない?」

それでも訴える弥子ちゃんに圭ちゃんの平手がとづぶ。ペシッと乾いた音が夕闇によく響いた。

「痛い」

弥子ちゃんは右頬をおたえて叫んだが泣かなかつた。やはり弥子ちゃんは強い子なのだ。

「痛くない」

たたみかけて圭ちゃんが叫ぶ。目が吊り上がりついていても怖い。ますます僕は家に帰りたいと思つた。

それで弥子ちゃんはなんとなく風邪で学校を休んだといつてこなつた。

「この子風邪だから、あなた看病してあげてよ

圭ちゃんが言った。僕は断ることもできずに横になつている弥子ちゃんの隣に座つた。弥子ちゃんはまだ不服そうだった。

「熱ある?」

僕はそれっぽく訊いた。弥子ちゃんは「ない」と声に出さず口だけを動かした。これほど元気な病人を僕は見たことがなかつたのでおかしかつた。

「わたしちょうどトイレに行つてくるかい」「ひがい」

料理をつくるまねをしていた圭ちゃんが立ち上がった。

「トイレはそこにあるよ」

と弥子ちゃんの呪元を指差して叫ぶと、圭ちゃんは再び皿を吊り上げて叫んだ。

「本当にトイレに行つてくるのよ」

赤いキャラクター物の靴をはいて、圭ちゃんは保育園の方に駆けていった。夕日が保育園の上で真っ赤に燃えていて、圭ちゃんの姿はすぐに真っ黒になつた。

カラスがのどをしごむように鳴いていた記憶がある。

ビニールシートには僕と弥子ちゃんの一人だけが残された。とても孤独だった。

すべての遊具が長い影を持つていて、僕たちのいるビニールシートに不気味な手をのばしていた。やうに僕は家に帰りたいという思いからより一層寂しくなつた。

横になつていた弥子ちゃんは身体を起こした。

「なんか寂しいね」

弥子ちゃんの右頬はさつき引っ叩かれたせいで赤くなつていた。

「お母さんま？」

僕がたずねると、弥子ちゃんは弱々しく笑つて言つた。

「どうち？　どうつけのお母さん？」

どうやら弥子ちゃんも孤独に怯えていたようだつた。

「本当のお母さん」

「わかんない。直くんは？」

今井直人だから直くん。

「僕もわかんない。早く帰りたいな」

「そんなこと言つなら、帰つたらいいじゃない！」

僕のすぐ後ろで叫び声がした。僕も弥子ちゃんもびっくりしてはつと後ろを振り返つた。

顔を真っ赤にして目を吊り上げている圭ちゃんが立つていた。

まずい、と思つたけどもう遅かつた。圭ちゃんは大声でまくし立てた。

「直くんがやりたいって言つたからやつたのに。何よ、そんなこと言つなんてひどいじゃない。いいわよ、そんなに言つなら帰つたらいいじゃない。直くんの本当の家に帰つたらいいじゃない」

弥子ちゃんがせぬるねりしてこる。僕は圭ちゃんの話を聞きながら考えていた。このまま」とって僕がやりたいって言に出したんだっけ。圭ちゃんがやりたって言に出した気もするが、今となつては思い出せない。

圭ちゃんの怒りはおそれるビックリかヒートアップしてこつた。泥だらけを踏みつけ、ペーパーランチートを吐くやべりやべりして泣きわめいた。

弥子ちゃんも泣き止むうな顔をしてこる。

僕はどうしていこのかわからなくなつてしまつて、ただその場に突つ立つていた。

やのとき保育園の方から先生の声がした。

「圭ちゃん、直ぐーん、弥子ちゃん。お母さんが迎えに来たわ
よ」

先生の声は暮れていく運動場によく響いた。

圭ちゃんも弥子ちゃんも急に表情が和らいだ。僕もほっとした。

先生によなづを語つて、それぞれ母と一緒に本町の家に帰った。

帰つ、さわに弥子ちゃんは僕に「バイバイ」と手を振つた。その弥子ちゃんがとても可愛くて、僕は弥子ちゃんのことが好きだとthought。

圭ちゃんは僕であっかんべーをした。

「圭ちゃんとけんかしたの？」

母は僕にたずねた。

「よくわかんない」

僕はそう答えた。母はあきれたように笑つて僕の手をひざった。深く暖かい手だった。圭ちゃんとけんかしたことなんてすべて忘れてしまいそうだった。母は優しかった。

次の日のことを見えていない。圭ちゃんと仲直りしたのか、していないのか。それはきっと僕にとって重要なことではなかったのだろう。

2

そんな遠い記憶のことを思い出していたら、二つの間にかドアの前に立っていた。

このドアの前に立つとき、僕はいつも色々な感情の中にいる。天にも昇るような気持ちのときもあつたし、重い足取りのときもあつたし、酔っ払って頭がこんがらがっているときもあった。

しかしだいたいの場合において僕は後ろめたい気持ちでこのドアの前に立つ。

僕は今年で三十四歳になる。

四年制の総合大学を卒業して、周りの人間とさして変わらない鉄鋼を扱う企業に就職した。在学中に付き合っていた彼女と入社四年目、二十六歳のときに結婚した。息子も一人もうけて上が七歳、下が五歳である。係長で部下もあり、これと言った不満もなかつた。

不満がなかつたのだから、きっと魔が差したとでも言つのだろう。僕が二十九歳のときに妻とは別に女をつくつてしまつた。妻のお腹の中には下の子がいた。妻は体調を崩しがちで、僕は性欲を持て余していた。

「あなたの手をわざわざせることはないわよ

妻ではない女は僕にそう言つた。今思えばその言葉を信じた僕が馬鹿だつた。

僕と女は関係を持つようになつた。週に二三度、上司と飲みに行くと偽り、女のマンション（つまり今僕がいる場所）に通つた。

女の名前は安田春奈といった。

上司に連れられて行つた居酒屋で働いていた女性だつた。背は高くなかつたが、常に姿勢がよく実際の身長よりも高く見えた。長い髪をくるくると巻き、その髪からはとてもいい匂いがした。二十六歳という年齢に裏づけされた大人の魅力のたまごがちらほらと顔を出していた。

きれいな女性だつた。

僕ははじめのうちこのまま両立していくかと思った。妻は僕を疑つていなかつたし、そのときは妊娠のことで手一杯だつた。春奈も

週二度三度会うだけで何の不満も言わなかつた。

しかし問題が起つた。

春奈に子供ができたのだ。僕は避妊には気を配つていたから問題はないと思っていたのだが、検査薬は陽性を示していた。

「私は産もうと思つの」

春奈の言葉は圧倒的な力で僕の前に立ちはだかつた。もちろん僕は反対した。色々な理由をつけて、金錢的な色もつけて懇願した。しかしそれ以上に春奈の意志は強かつた。

出会つた当初、僕は春奈のことをなんと自由で心が広い女性なのだろうと思っていた。

しかし子供をお腹に宿してから彼女は徐々に本性を現していった。当然と言えば当然だ。春奈は守るべきものができて怒りっぽくなつた。そして妻と別れて私と一緒にになれと迫るようになつた。その迫り具合は日々、年々強引になつてきた。

春奈と僕の娘は今年で四歳になる。誰にもばれていないことが奇跡だった。もつとも最近では妻も疑つようになつてきだが。

そして僕は今、春奈とその娘の小百合の住むマンションのドアの前に立つてゐる。会社帰りだ。腕時計を見ると午後八時半を指していた。妻には忘年会の打ち合わせだと言つてある。

そう言えば一人の息子にもクリスマスプレゼントを買つてやらないとな。

僕はため息を一つ漏らしてからドアを開けた。

「ただいま

僕はこの家に入るとき必ずそう言わなければならない。小百合が産まれたときに春奈が決めたことだ。

「おかえり」

僕はその家に入つて、かばんを置く。マートを脱ぐ。そして部屋の中できやけに異彩を放つ赤いソファーに腰かけた。

春奈がうれしそうに囁つ。

「今日は中華よ」

テーブルの上に王将で買つてきた餃子や唐揚を並べる。

春奈は以前働いていた居酒屋をやめ、今はスーパーマーケットでレジ打ちをしている。生活のリズムが変わらうと春奈は一切料理をつくらなかつた。いつも出来合のものを買つてきた。僕はネクタイを緩め、皿の飯もなしに餃子を食べた。

味気ない食事をしながら、やはり春奈とは暮らせないということを伝える機会を伺つていた。

僕はもう決めていたのだ。妻とともに生きていこうということを。

「パパ、おかえり」

小百合がぐぐぐと歩いてくる。春奈に似たのか、芯の通ったような強さを持つ健康的で明るい子だ。

「ただいま。いい子にしてたか」

僕が小百合の頭をくしゃくしゃとなでてたずねると、小百合は元気にうなづいた。

しかし突然そこへ春奈が血相を変えて割り込んできた。

「いいえ、この子、今日風邪で保育園を休んだのよ」

小百合は驚いた顔で母を見ている。

「休んでないよ」

小百合が訴えても母の春奈は聞き入れない。僕は春奈の強引な意見に戸惑っていた。

小百合が「休んでないよ」と訴え続けていることに腹を立てた春奈の平手がどぶ。ぺしんと乾いた音が部屋に響いた。

「痛い」

小百合は右頬をおおえて叫んだが泣かなかつた。やはり小百合は強い子なのだ。

「痛くない！」

たたみかけて春奈が言つ。

春奈の魂胆は見えていた。僕に心配をかけさせたいのだ。小百合が病気だからあなたについていてほしいのなどと思っているに違いない。そしてそのまま一緒に暮らしあうと考えている。僕は春奈の露骨な策略に寒気を覚えた。

母の勢いに負けて小百合は臥室のベッドで横になつた。

「この子風邪だから、あなた看病してあげて」

春奈が言つた。僕は断ることもできずに横になっている小百合の隣に座つた。小百合はベッドに潜りこみはしていたが、まだ不服そうだった。

「熱ある?」

僕は一応たずねた。小百合は「ない」と小声で答えた。これほど元気な病人を僕は見たことがなかつたので、と思ったが、よく考えてみればはじめてではなかつた。一度目だ。

僕は驚いた。

あの日のまま」ととまつたく同じ流れではないか。どうしてこんなことが起こつているのだろうか。

混乱する頭を抱えて僕はただ小百合の髪をなでる」としかできなかつた。

気がつくと辺りはしんとしていた。一切の音が取り払われ、その

静寂に耳が痛んだ。

「なんか寂しいね」

小百合がつぶやいた。小百合の右頬は赤らめで品かれたせいでも赤くなっていた。これも保育園のときと同じだ。

突然物音がしなくなつたので私は小百合に尋いた。

「お母ちゃんは？」

「どうね、どうのお母ちゃん？」

小百合は静けさに怯えながら、しかしそうかりと言つた。この言葉まで保育園のときと同じだ。まるで小百合も僕の過去を知つて、それをなぞつてているだけのようだ。

僕の頭の中で春奈と妻がけりつを混じつ合つた。

「どうね、どうのお母ちゃん？」

「わかんない。聞いてみただけ」

小百合はそつそつと布団を頭からかぶつた。

小百合の言った「どうちのお母ちゃん？」といつ問いかけに春奈と妻がちりつを混じり合つてこる。まくまくのりのりのお母ちゃんを選べるだろうか。春奈だろうか妻だろうか。

「……妻だな」

「そんなに奥さんのこと気が気になるなら、帰つたらいいじゃない！」

僕のすぐ後ろで叫び声がした。僕も小百合もびっくりしてはっと声のした方を向いた。

そこには顔を真っ赤にして皿を吊り上げている春奈が立っていた。

まことに、と思つたがもう遅かつた。春奈は大声でまくし立てた。

「あなたが私とやりたいて言つたからやラせてあげたのに。何よ、奥さんのことばっかり気にしてひどいじゃない。いいわよ、そんなに言つなら帰つたらいいじゃない。あなたの本当の家に帰つたらいいじゃない！」

小百合はおろおろしている。僕はこの強烈な既視感の中で春奈の話を聞きながら考えていた。やりたいと先に言つたのは僕の方だつたろうか。春奈が先に言い出した氣もあるが、今となつては思い出せない。

春奈の怒りはおさまるどころかヒートアップしていく。小百合の部屋で暴れまわった。本を投げつけ、地球儀を倒し、机を蹴つた。小百合はすっかり怯えきつてベッドの中に身をひそめた。きれいに片付けられていた部屋を春奈は怒声と大きな音を立ててめちゃめちゃにしていった。春奈は泣き叫びわけもわからない言葉を口走つていた。

僕はどうしていいのかわからず呆然としていたが、ひとつだけはつきりしていことがあることがあった。

それはもう誰も助けに来ないところだ。あの田のまぼじとのよ
うに先生も母ももう誰も僕を救ってはくれない。僕は自分自身の力
でこの場を解決しなければならないのだ。

僕は深呼吸をした。

「もう別れよう。慰謝料だつて払う。妻にばれてもかまわない。も
うこゝんなのはだめだ。勝手だとは思つけど、別れよう」

春奈は虚を衝かれたように黙り込んだ。しかしそれも一瞬のこと
で次の瞬間にはもう叫んでいた。

「小百合はまだいるのよ。小百合の将来のことを見たまじう考え
ているのー。」

「小百合は僕と春奈の子だ。だからどちらかが引き取る」

「あなたは最低よ。小百合はものじやなーのよー。」

春奈は部屋の隅にあつた「ミミ箱」を蹴とばした。紙くずや鉛筆けず
りのカスが散った。春奈はそのことにまったく気がつかない。

「でも今の状況は小百合にとって最悪だ。だからどちらかが引き取
るんだ」

「小百合をあなたなんかに渡すもんですか！」

春奈はベッドに身をひそめている小百合の元に駆け寄つて頬をな
でた。小百合は母の荒れた姿に身を固くさせてくる。

「帰つて。今すぐここから出でていつてー。」

春奈の投げた本が僕の右肩に当たった。それはとても痛かっただが、心の方がもつと痛かつた。慣用句などではなく僕の心が感じたのは物理的で切実な痛みだった。

春奈は手当たり次第に物を投げつけた。枕、ぬいぐるみ、消しゴム、そして小百合が泣き出した。

僕は黙つたまま居間でコートをとり、かばんを持って外に出た。ドア越しにも春奈の泣き声が聞こえた。

冬の夜風はとても冷たく心身に堪えた。この冷たさに抗う術を僕は持ち合わせていなかつた。襟を立てることが精一杯だつた。

十一月が過ぎていく。今年もあと少しで終わる。そして来年が否応なしにせつてくる。来年のことなど僕には想像もつかない。

僕はただ家に帰るために田の前にある階段を下りていつた。

(後書き)

はじめての投稿になります。頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4803f/>

ままごとはまたべつの物語

2010年10月15日05時31分発行